特定非営利活動法人 マザーハウス会報（2015年1月15日創刊）

No.68

マザーハウス たより

あなたは愛されるため、また、愛するために生まれてきたのです。
あなたが必要であり、大切です。マザーハウスはあなたの家族です。

2020

8月号

表紙：横須賀のコンチョさん

２　理事長挨拶
４　社会の声
１８　ささきみつおコーナー
１８　ラブリーＤＡＹＳ
１９　育児日記
１９　塀の中のたより
２１　健康相談窓口
２２　回復プログラム　入門
２２　プリズムアート倶楽部
２３　行事予定
２３　お知らせ

♪移送・出所される方は必ずご一報ください。今後、ＭＬＰ（文通）に参加している方は文通相手へのお手紙のみ出して頂ければ大丈夫です（差出人欄の住所で確認できるため）。ＭＬＰに参加していない方は事務局にご連絡ください。
♪２３ページのお知らせをご確認願います。

このマザーハウスたよりは、公益財団法人日工組社会安全研究財団の助成により作成したものです。

理事長挨拶

皆さん、いかがお過ごしでしょうか？東京では、新型コロナウィルス感染症にかかった方が増加しておりますが、マザーハウスでは日々、神様に祈り、守られながら活動しております。

七月末に、参議院議員で法務委員会の理事をされている方のところに行きました。その際、法務省矯正局と保護局の人たちが五名おられました。法務省の方から引受人、特別定額給付金、面会、医療等について説明を受けました。七月三十日現在、コロナ感染者は刑務官十五名、収容者一名とのことで、「刑務所内で感染者が発生したら大変なことになると危惧しております」と伝えたところ、感染防止対策ガイドラインを渡され、読ませて頂きました。また、白内障が酷くなっている高齢受刑者に対する手術等の医療措置や、他の医療事案について、きちんと対応して頂けるように要望しました。

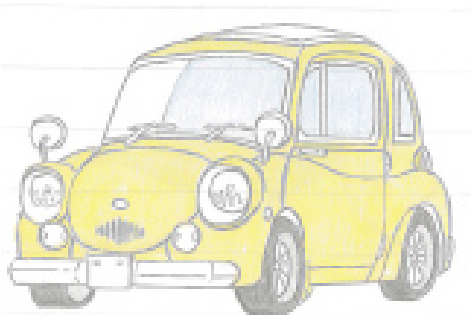
それから、特別定額給付金について、職権消除されている方は、戸籍謄本と付票を取り寄せ、刑務所の住所地である役所に住民票の登録をすれば、申請書が送付されてくることなど、刑務所の職員にも周知させていると説明を受けました。受刑者の皆さんには、以前のたよりと一緒に両面コピーで「特別給付金の受け取り方・申請書送付依頼書」を同封しましたが、この用紙に記入して住民票所在地の役所に送付してください。必ず発信記録が残りますので、支給されない場合の証拠となるでしょう。

特にマザーハウスとしては「引受人」が不許可となることが納得できず、再三、保護局に申し入れをしてきましたが、一向に改善されない状況です。そこで観察課の職員に、「再犯防止のためにも、社会復帰する際に引受人がいるといないのでは、精神的にも大きな違いがありますが、どうなのでしょうか。引き受けるところがあるのに、それを認めないのであれば、法務省が引受人を用意したら如何ですか。マザーハウスでは様々な方と連携しながらサポートしています。そのこともしっかりとご理解して頂きたい」とお伝えしました。今後、どのようになるか分かりませんが、各市区町村の再犯防止担当とも連携していきたいと思っています。面会が可能か不明ですが、希望する方は非親族登録として「ＮＰＯ法人マザーハウス　五十嵐弘志」で登録をしておいてください。旅費交通費のこともありますので、すぐに実現できるわけではないですが、対策を弁護団とともに講じていきたいと思っています。

いつも同じことばかりで申し訳ないですが、受刑者の皆さん、依頼事の際には費用がかかることをご理解ください。先日も、年金の手続きをして、無事に受給されているのに、「他に支払うところがあるので社会復帰後に支払います」と言われました。皆さんはどう思いますか？人を利用するだけ利用して、このようなことを平気でするのです。こちらの思いや行動をないがしろにされたような気持ちです。どこに行くにも、車や電車などを使用すれば費用が掛かります。そして、時間も掛かります。そのことには全くお構いなし、支援団体だから支援するのが当たり前だと思っているのか分かりませんが、今後は要件内容にもよりますが、きちんと費用を支払ってから依頼事をしてください。例えば、年金調査や請求手続きなら、各二千円です。その他は別途相談が必要なので、その都度、ご連絡ください。こちらも経費が掛かることをご理解ください。また、何も相談せずにいきなり金銭と用件を送りつけてきて、「対応が無理なら返金してください」と言うのも止めて頂きたいです。マザーハウスは御用聞きではないと再三伝えているのに、自分勝手ではないでしょうか。何か特別な対応が必要な際は、まずはご連絡ください。

社会復帰して数か月が過ぎ、お金が無くなり、どうにもならなくなってから、「助けてください」と連絡をしてくる出所者がいます。何故、社会復帰後にすぐ、マザーハウスなどのサポート機関に来ないのでしょうか。その答えは皆さんが一番良く分かるのではないでしょうか。「最悪、どうにもならなくなったら行けばいいか」という甘い考えでは更生は程遠いと思います。自分を過信せず、受刑中から、社会復帰後について、どう生きるべきかについて、考えることが必要だと思います。私は死に物狂いでやってきましたが、それでも未だ社会の厳しさを痛感する日々です。

先日も、「マザーハウスに行きます」と何度も手紙が届いたので、出所日は休日でしたがスタッフ二名に出勤して頂き、待っていてもらったのですが、とうとう来ませんでした。これは一度や二度、一名や二名の話ではなく、今まで散々あったことです。



大阪のピーちゃんさん「スバル360」

信頼関係を壊すのは簡単ですが、築くのはとても大変です。そのことは皆さん自身が一番よく知っていると思います。「自分は大丈夫だ」と考えるのが一番危ないです。先日も、今年の一月から関わっていた人が突然、いなくなりました。この方は重大事件を犯した方であり、被害者のことを全く考えておらず、自分だけのことしか考えず、人に迷惑をかけても何とも思わないのだと思いました。「真の愛を知らない人だから仕方ない」と思わないと、こちらが潰れてしまうと感じました。

マザーハウスの活動で、傷ついた心や痛みを抱えている人と接していると、家族の大切さをつくづく感じます。両親の溢れる愛の中で育ち、多くの人たちの愛を頂いた子どもたちは、人に対する思いやりや愛情が違うと思います。私自身、家族の愛を感じられなかった者として、子どもたちから神様の愛を日々、教えて頂いております。そして子どもを通して聖母マリアの愛にも触れているように感じます。毎日、愛の中で生きていることを感謝します。

先月号で、聖書の「放蕩息子のたとえ」を取り上げましたが（ルカ十五章十一～三十二節）（父から生前贈与を受けて旅に出た下の息子は、放蕩の限りを尽くして食べるものにも困り果て、「もはや息子と呼ばれる資格はない。せめて雇い人の一人にしてもらえたら」と覚悟し、父のもとに帰ることを決める。しかし、父は遠くから息子を見つけて走り寄り、息子を抱きしめ、急いで良い服と履物、指輪を持ってくるよう雇い人に言いつける）、その続きで、柳田敏洋神父様の言葉（「コロナウイルス感染症に向き合う信仰」『カトリック生活』ドン・ボスコ社、二〇二〇年七月号より）をご紹介します。

「ここで言われる指輪は象徴的です。指輪は父親の継承権をもつシンボルだからです。下の息子は父親からもらった財産をすべて無駄にしてしまったのに、そしてもう息子と呼ばれる資格はないと思っているのに、父親の思いはそれをまったく超えているのです。ここに神の圧倒的な愛の姿、ゆるしの大きさを見ることができます。神の愛とゆるしは人間の思う神の姿をはるかに超えているのです。まさにイエスはこのたとえをとおして神は無条件の愛・アガペそのものであることを示したのです。ですから、人祖が犯し、人類に受け継がれることになった神への背きという罪を、神はかぎりない愛からすでにゆるしておられると理解することがイエスの伝える父なる神の姿から読み取れます。神の視点からの救済理解が非常に大切です。しかし、残念ながら、エゴイズムは人間の心の奥に根深くあり、そのために旧約聖書のさまざまな箇所（エレミヤ三十一章三十三節、知恵十一章二十三節など）に見られる神の無条件の慈しみとゆるしを人間は信じることができません。原罪とは『人間が神の似姿としての本来性を見

失った状態』であり、これがエゴイズムの源ということです。そこで父なる神は子なる神を遣わし、神が人間イエスとなることによって神の愛とゆるしの真実を人類に示し、同時に人間の本来性を示したのが受肉の神秘ということです。人間イエスが同時に神であるからこそなしえた証しです。このような考えに驚かれる方があるかもしれませんが、イエスをとおした神の目から見るならば、愛そのものの神から救いをより深く一貫性のある形で理解することができると思います」。

神の愛の大きさ、深さ、そして赦しを体験した時に人は変わることができるのだと思います。愛の源である神の愛、神であり人間であるイエスの愛を知らない人は変わることが難しいし、また、頭だけの理解でも意味がないと思います。聖書を心で味わいながら読むことで、聖書の言葉が生きてくるのだと思います。教会で洗礼を受けても、キリストの愛に包まれ、祈りと真の愛の実践をしていないと、外側だけを清めて内側は真っ黒、という状態になってしまいます。教皇フランシスコが姿で示していることを多くのキリスト者が実践するべきだと思います。特に、教皇来日の際に「すべてのいのちを守るため」というテーマを掲げた以上、一人ひとりの司教が率先して実践しなければ、全く意味がないと私は思います。自分にできることを神様のために実践していきたいです。

社会の声

学生の感想 ー

■六月に京都大学で行ったオンライン講義に寄せられた感想をご紹介します。

☆

自らの罪や、罪への非難を受け入れた上で、それらを隠すことなく社会で生きていくという五十嵐さんの姿勢が素晴らしいと思いました。また、受刑者が無事出所できたとしても、社会復帰しづらい現状があることに、色々と考えさせられました。社会に認められることが更生ならば、社会の側もそれを支援する仕組みが必要だと感じます。

お話の中で、当事者を我が子のように受け入れ、時には叱責することも必要だと仰っていました。しかし、愛情を持った叱責であっても、相手に伝わらず、拒まれることはないのでしょうか？また、当事者との対話の中で、最も気を付けていることがあれば、合わせて教えて頂きたいです。

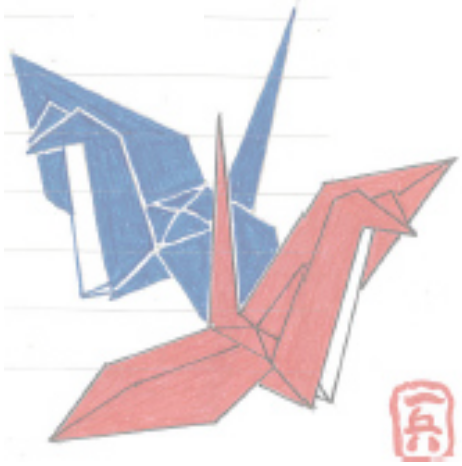
☆

どんな人であれ話を聞いてあげたい、偏見を持ちたくないと思いました。基本的にみんないい人だと思いたいです。質問もさせて頂きましたが、警戒心を持つことと偏見を持つことが私の中でどうしても混ざってしまいます。ベンチがたくさん空いているのに、わざわざ私の横に座られたお爺さんは悪い人じゃなかったのかもしれない、けれど私は怖がった、逃げた。それでお爺さんは傷ついたかもしれない。私の中では、お爺さんに偏見を持ってしまったから「怖い」と思ったと自己分析しています。しかし偏見を持たないようにしようとすると、知らない人についていってはいけない、話してはいけないといった当たり前のことまで、疑い始めてしまいました。私の考え方が極端なだけかもしれませんが、疑われた人はきっとそれに傷ついて犯罪をしやすくなってしまうのかもしれない、と考えると、疑うこと自体がダメなことに思えてしまいます。その線引きが私には分からなくなってしまいました（すごく馬鹿な考え方をしているのは分かっていますが、みんなをいい人だと思いたかったら、まず疑うこと自体が悪いことに思えてしまうのです）。

また、話が少し逸れますが、五十嵐さんにとって犯罪は失敗ですか？ それともどうしようもなかったものですか？ 犯罪は環境に原因があるのか自分に原因があるのか、色んな議論がありますが、個人的な感覚を教えて頂けたら嬉しいです。

☆

「立ち直り」に関しては、当事者も支える側も相当な覚悟が必要なのではないかと思います。その覚悟に立ち向かえるだけの責任が、今の僕にはないなと、正直思ってしまいました。今後人生を歩んでいく中で、その覚悟と責任を持てるように、一歩一歩踏みしめていきたいと思います。いつか、何かの形で「立ち直り」に本気で関わることができればと思います。



一兵さん

☆

学生という未熟な存在でも、かえってその青臭い熱が人の心を打つこともあるのだなと感銘を受けました。自分ももっと、熱を持って日々を生きないといけないなと思わされました。

☆

先日の講義でもあったように、北欧のような「受刑者への支援のための刑務所」という考えが日本にも根付くためには、五十嵐さんたちのこのような活動がもっと知れ渡り、理解が深まることが欠かせないと感じた。

☆

受刑者との手紙のやりとりの話で、母親のように厳しさも優しさも持つことが大切という話が印象的でした。実際の手紙のやり取りも気になりました。

☆

私はネットなどの意見については、全く責任性のない言葉だから無視して構わない、という風に考えていたので、そういった意見も受け止めさせた上で支える、という話はとても印象に残りました。

☆

衝撃の連続でした。自分の（勝手な）受刑者の方や刑務所に対するイメージと、五十嵐さんのお話はかけ離れていて、自分の無知さを恥じた一方で、多くの学びを得ることができました。特に、社会と触れ合い、地域の人々としっかり関係性を作っている、というところに感銘を受けました。支援の在り方、そして私達自身の社会との関わり方を再考させられる時間でした。

☆

お話を聞きながら、犯罪という領域ほど、本当の意味での「社会」を強く意識せざるを得ない領域はないと思った。犯罪社会学が必要な理由が分かった。

☆

人と正面から向き合うこと、目の前の人を心から愛すること、この言葉がとても印象的でした。社会はとても厳しいが、自分のしたことに責任を持って、辛くても正面から向き合っていかなければならない、とおっしゃっていました。今の社会は寛容さに欠けるというか、ともすると見知らぬ人にまで攻撃を行ってしまうような状態にあると常々感じていますが、そのような中で人と正面から向き

合うこと、たとえその人が受刑者であっても、その人を愛そうとすることが、今の時代に求められる姿勢なのかと思います。

☆

非常に貴重な体験をさせて頂いた。私はこういう話を聞くときはすぐ感極まってしまうのだが、社会においてはそれが同情・偽善・「分かった風」との記号になってしまうこともあり、失礼になっていないかな、難しいなという思いを終始抱いていた。気持ちや価値観が絡む問題は難しいが、だからと言って目を逸らさずに見ていきたいなと感じた。いつもこういう授業の時は人に知られないようにして泣いているのだが、今日はオンラインということもあって少し難しかった。けれど、マザーハウスの方々がされているような取り組みを知ることで、話を聞くことで、何かできることがあるのではないかとも感じた。実際にボランティアとして参加してみたくなった。

☆

出所者が社会の中で生活していくために最も大切なのは、関わりを持つことであるということを、より一層実感するお話だった。ただ、質問タイムの中のやり取りでもあったように、自己防衛との兼ね合いもあり、難しい問題であるということも考えさせられた。居場所があること／居場所をつくることの重要性は世の中の人々一般に共通することで、犯罪をする人もしない人も同じ人間なのだと、改めて考えさせられた。

☆

犯罪者に対する偏見が世間にあり、犯罪者の声が人々に届いていない現状、「誰もが安心して住める社会を」と言う文句には犯罪者が入っていない現状について考えさせられた。当事者の体験談を聞くことは犯罪者に対する考えを変えるきっかけになるので、より多くの人にこのような話を聞いてもらいたい。

☆

日頃、誰においても「こういう人だから」と決めつけないで接することを心がけていましたが、犯罪をした人に対しては分からないことの方が多く、どうしても怖い印象を持ちがちでした。しかし、今回お話を聞いて、受刑者も一人の人間であることを改めて考えさせられ、とても良い機会になりました。

☆

人を受け入れることとは何なのか、改めて考えさせられました。今までは、人を受け入れるということは、相手の言動や考え方を肯定する必要があると思っていたのですが、それだと受け入れられる範囲が狭まってしまうような気がしました。本当の意味で受け入れるとは、「相手の話を聞く」ことから始められるものだ、という意識があれば、どんな相手でも、過去に犯罪をしてしまった人でも、まずは聞いてみようという姿勢でいられると思いました。

また、人は誰しも社会に受け入れられ、周りの役に立てることが、生きることにおいて非常に大切であるという点を考えると、犯罪者の方にもそういう気持ちがあることを忘れてはならないと思いました。今はまだそういう方と関わった事がないのですが、相手がどういう背景を持つかということに偏見を持たずにまずは話を聞き、居場所を作ることがいかに大事かを学ぶ、非常に貴重な機会でした。

☆

当事者の視点から自分の経験を踏まえた支援をされているのが大変意義あるものに感じました。誰もが自分の力で社会に復帰できる訳ではないですが、その力添えをすることは社会において非常に重要であると感じます。

ただ、これは非常に失礼になってしまうと思うのですが、自分個人は、犯罪経験者を、犯罪未経験者と同じように見ることは未だ難しく思います。同じ条件であれば、そのよう

な経歴のない人と関係を結びたい、と思うのはいけないことでしょうか。もちろん社会福祉などの大義を掲げれば偏見なく受け入れるべきだと思うのですが、いざ自分が実際にその選択を取れるかと問われると自信がないです。活動に非常に意義を感じるがために、むしろこの点において自分の中で葛藤があります。これから社会問題について考える際にも、この葛藤を忘れないようにしたいです。

☆

本日は貴重なお話を有難うございました。このような活動があることを周囲にも伝えることで、微力ながらお力になれればと思います。

☆

個人的に一番衝撃的だったのは、「社会に出ても居場所がないから刑務所のほうがいい」ということをおっしゃる方がいることです。それだけ社会の支援や理解のなさが、出所者を苦しめていることが分かりました。マザーハウスさんの活動に厳しい目を向ける方もいらっしゃるかもしれませんが、もっともっと認知度が高まって欲しいと思いました。世間に理解があってこそ、出所された方が真に社会に復帰できると思いました。

☆

過去がどのようなものであろうとも、人は他者との関わりによって変わることができる、ということを強く実感し、自分に当てはめて勇気づけられるとともに、今後人と関わる時はそれを忘れないようにしようと思いました。

☆

今日の講義は、普段の講義や教科書等で学んでいる犯罪や刑務所、社会復帰などについて、より実践的な面、体験者の視点から学ぶ機会であり、自分が生きている社会と学問との関連性を実感するという点でも、非常に有意義な時間だったと思った。

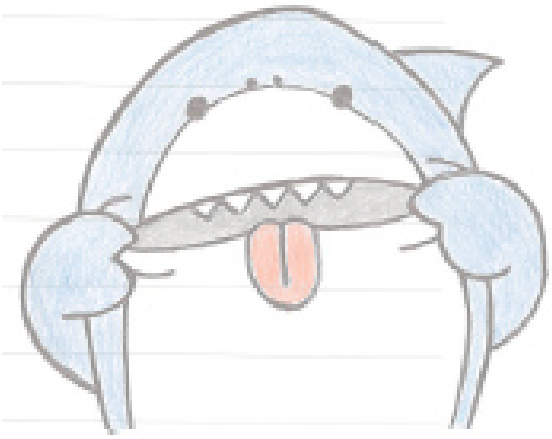
特に、自分を含めた社会からの偏見や人との関わり方、正面から自己と他者に向き合うことの難しさを、表面上の言葉ではなく、実体験からくる非常に力強い言葉で受け取り、自分の学問への向き合い方を猛省する機会になった。マザーハウスのホームページ上にも多くの情報や姿勢について述べられているところがあったが、実際に当事者のお話を伺うことは、心に訴えかけられるということで、思っていた以上に強いものだった。

☆

色々勉強になった。受刑者の社会復帰のため、支援団体が社会の力を集めてできるだけ受刑者に対する偏見をなくす。例えば、ボランティア活動には、受刑者・元受刑者と大学生の触れ合いという流れもある。相互の交流によって、繋がりが強くなり、大学生側が受刑者・元受刑者の社会復帰を受け入れやすくなる。

☆

質疑応答の時間で触れられた話なのですが、長期的に関わることができず、一回きりしか関われない場合、その短い時間の中で何ができるのかを考え直す機会になりました。否定されることが多かっただろう方々にとって、受け入れる・話を聞くということがいかに大切かを深く感じることができました。



Y刑　Tさん

☆

お話の中で、五十嵐さんが「社会の常識は刑務所の非常識」だと述べられていましたが、それほどまでに刑務所内の環境が社会の環境とかけ離れていると、身をもって感じておられるのだなと実に印象的でした。「更生のための教育を受けたければ、受刑者自らアプローチする必要がある」とおっしゃられていたように、現在の刑務所のシステムでは、受刑者一人ひとりに向き合うことに限界があるのだと強く感じ、歯がゆさを感じました。

我々は犯罪をしたという事実だけで受刑者や出所者を捉えてしまいがちであり、その他の面は見過ごされることが多いけれども、交流を通して彼らと触れあうことで、犯罪も一面にしか過ぎないのだという意識を持つことが、犯罪者は恐ろしいというイメージを払拭することに繋がり、受刑者にとっても社会の人々にとっても利益となるのだ、ということを学び、自身の受刑者に対する考え方や態度を改めて見つめ直すことができました。また、今の未熟な自分では難しいですが、いつかラブレター・プロジェクトに参加してみたいと強く思いました。

☆

普段の生活の中で受刑者の声を聴くことはなかなかないので、貴重な体験でした。

☆

当事者のリアルな声が聞けた非常に貴重な時間だった。受刑者が社会復帰するためには刑務所だけでは不十分だということを強く実感した。刑務所と社会復帰支援団体の連携を深めていくことが大切だと思った。

☆

犯罪者の処遇に関する施設について、近隣住民からのネガティブなリアクションが一定数存在するというイメージがありましたが、お話を聞いて、様々な努力や工夫によってそれを緩和することができるということが、とても研究にとって有益な論点でした。

―おわり―

一兵さん「Ｒちゃん記念切手」

社会の声

学生の感想 2

■四月に九州大学で行ったオンライン講義に寄せられた感想をご紹介します。

☆

今回は、受刑者や刑務官のメンタルケアの必要性についてなど、実務の方や当事者でないと行き着かないであろう問題点まで知ることができて、非常に有意義な時間でした。今後は、今回教えて頂いた矯正施設の問題点を解決するにはどのような施策が必要なのか、自ら考えていきたいと思います。

☆

お話の中で特に印象深かったことを二つほど挙げさせてもらいます。

一つ目は、刑務所では社会で常識となる行動を取らせてくれないというお話です。個人的なお話もできない環境で、挨拶すらも許されていないのは非常に驚きました。受刑者の方の管理のために規律で縛り付け、受刑者の方の思考力を奪ってしまっていることについて考えてみる必要があると切に感じました。

二つ目は、社会復帰を主体的に促すべきは行政だというお話です。刑罰を受けた経験が分からない人が多い、でも分からないから放置するのではなく、分かろうとする過程で見えてくることがあると、その言葉はどんなことにも当てはまると思います。私自身、自分が分からないことから逃げたり人に聞いてばかりだったりして、もっと向き合えば良かったと思う経験を持っています。分からないことを分かろうとする努力もしていこうと強く思えました。

☆

信頼をしてもらう相手を持つこと、更生の土台を持つことなどが変わるきっかけになると分かりました。自分の強い意思を持って悪い仲間や考えを断ち切る、それを態度で見せていく、それには人との繋がり、手助けが必要だというお考えに共感しました。

刑務所の中での刑務官との関係性や、元受刑者の人たちへの対応の仕方など、リアルなエピソードが聞けたことは勉強になりましたし、周りの友人や家族にも知ってもらいたい話でした。

☆

今回の話を聞いて、刑罰の意味についても改めて考えさせられました。日本の応報論を基礎にした考えでは、刑罰は当たり前のように思っていましたが、刑務所での画一した行動規律、上下関係、報奨金の制度などが果たして犯罪をした人の次に繋がるものなのか、という疑問が浮かびました。刑務所は二度と戻りたくない嫌な場所であるべきですが、社会とあまりにかけ離れた場所となり、本来の人間性や社会性が失われる所となるのは間違いです。必要な制度や本人が変わることを受け入れる社会をつくることを考えたいです。

また学びを深めてお話を聞かせて頂きたいです！

☆

どれもとても興味深いお話であり、またその中には考えさせられるものも多く含まれていました。

とりわけ、犯罪抑止や社会復帰に際して、「愛することの大切さ」や「人の役に立つことができたということ」の体感・体験が必要だというお話にはとても考えさせられました。なんとなくそういったことが必要であるということは、犯罪抑止や社会復帰について普段考えるときにもふと思い至ることなのですが、改めて、しかも実際にその分野で支援等を行っている人から直接聞いたことによって、それらの重要性を再認識し、またその必要性を強く感じました。

しかし、「愛することの大切さ」や「人の役に立つことができたということ」を体感・体験させるというのは、そう容易いことではないように思います。それらの達成のためには、具体的にどのような支援や活動が必要なのか、しっかりと考え、そして実践していかなければならないのでしょう。

また、その支援や活動には「社会」のコミットが必要不可欠であり、社会の構成員全員が日頃から関心を持って接することも求められるのではないかと私は考えています。私自身、これからそのような態度であり続けたいと思います。

その他にも、本当に多くの興味深いお話を聞くことができました。そこで得られた社会復帰の実情に関する情報や五十嵐さん自身の考え、またそこから私自身が思い考えたことなどの全てを忘れないよう心に刻み、これから刑事政策の学習に励みたいと思います。

―おわり―

社会の声

学生の感想　3

■七月に立正大学社会福祉学部で行ったオンライン講義に寄せられた感想をご紹介します（一部、五十嵐理事長の返答入り）。

■【学】：学生
【五】：五十嵐弘志（マザーハウス理事長）

☆

【学】家族間の殺人事件が多いとのことで、「関わることが多い、良いところも悪いところも見えるから」と仰っていましたが、その話を聞いて、なぜそのようになってしまうのかと思うと同時に、すごいゾワっとした感覚になりました。また、障がい者を一般人と一緒に見るというのはとても難しいと思いました。出所して自分が変わる訳ではなく、その人を取り巻く環境もその人を受け入れる環境にしなくてはならないなど、様々な変化はとても難しいであろうなと思いました。

【五】社会復帰した人が変わらないといけないと思います。その人が変わった姿を示して行くからこそ、周囲も変わるのではないでしょうか？同じ人であると考えることが大切であると思います。

【学】三回も刑務所に入って世間からの目も相当なものなのに、わざわざ話をしてくれてとても有難かったです。やはり、出所してから、同じように出所した人の社会復帰の後押しをするのは素晴らしく、これからも続けてほしいと思いました。

【五】有難うございます。是非、応援してください。

【学】自由があるということは当たり前だと思っていましたが、今回の話を聞いて当たり前ではないことなのだなと思わされました。

【五】自由だからこそ、色々な道を生きていることを実感できるのかなと思います。

【学】私は特別支援学校の教員を目指しています。社会福祉士の反応を見て「頭だけなんだなあ」と感じた、という言葉がとても刺さりました。これから教員になるにあたり、座学で学んできたことをアピールしたり、知識だけを糧にしたりして生きていくのは絶対にやめようと思いました。私は養護老人ホームで措置入所された触法発達障がい者の方と関わったことがあります。その方は昔からコミュニケーションをとることが苦手で、職に就くことができず、何度も窃盗をしてしまっていた過去があります。ですが、措置ではありますが、施設に入所して居場所を見つけ、施設内の落ち葉掃きや植物の手入れなど奉仕作業を役割としてその方に任せることで、笑顔が増えてコミュニケーションを自発的にとってくださるようになりました。

　マザーハウスでは文通を始め、社会と繋ぐお手伝いをしていることを知りました。社会から隔絶された刑務所からの更生・再犯防止のために、社会が変わらないからこそ、マザーハウスのような更生支援のお手伝いをしている団体はとても重要であると感じました。文通ボランティア活動において、特別に必要なことなどはありますか？

【五】何もありません。同じ人であることを忘れずに向き合ってあげれば良いと思います。また、ダメなことはダメと言ってあげることが大切であると思います。

【学】刑務所で一番辛かったことは何ですか？

【五】自分の正直な考えを言えなかったことです。

【学】刑務所から抜けた後、自分が変わったなと思う部分は何ですか？

【五】どんなことでも諦めずに行動していくことです。

【学】刑務所での生活やそこからの社会復帰を経験なさっている五十嵐さんの言葉はとても重く、胸に刺さりました。犯罪者を犯罪者として見るのではなく、自分たちと同じ一人の人間として見ることの大切さを学びました。また、出所後の環境や人との繋がりの大切さも学びました。

【五】社会復帰するには社会との繋がりが大切であり、「生きている。生かされている。繋がっている」ことを体験することが必要だと思います。

【学】普段は、良くも悪くも何かの事件に対して被害を受けた人と話すことはあっても、加害者になった経験のある人と話すことはあまりないので、とても貴重な話が聞けました。犯罪は決して許せることではないけれど、それが起こって初めて自分と向き合うことができる状態になる人もいるし、環境や家族との関わりの中で犯罪をせざるを得ないような人もいると思うので、抑制したり未然に防ぐことはもちろんのこと、更生し社会復帰に向かうことに対しても注力していくことが大切だと感じました。

【学】私の身近な人間が犯罪者になってしまったという経験が無いので、正直なことを言うと、今すぐ五十嵐さんのような気持ちを持つことは難しいのかもしれないと思いました。ですが、マザーハウスのような活動はかなり重要だと今回感じました。助けようとする人間が居ると分かるだけでも、そうでない人より、再犯するケースは減っていっているのだと感じました。自分も、犯罪者の方について考えるきっかけとなったお話でした。

【学】私は、罪を犯したことのある人の経験を本人の口からを聞いたことがありませんでした。以前、台湾で、罪を犯した子どもたちが住む施設でボランティアをしたことがありますが、彼女たちは自分の経験などを話すこともなく、話す時間を作ることもありませんでした。罪を犯した経験や、利用者と支援者という関係の前に、人として必要な経験や感情に触れるためにあえて、その経験を知らされることはありませんでした。それによって、私は彼女たちと「人と人という関係」で向き合い、彼女たちがどうしたら自分らしく生きていくことができるのかを考えながら日本語を教えたり、ダンスや裁縫などの体験を作っていくことができたと思っていました。

しかし、今日の話を聞いて、経験やその人が置かれている状況、その人が必要としていることを知ろうとしなければ、本当にその人たちにとっての社会復帰を支えることはできないのではないかと思いました。私の海外での取り組みはあくまでボランティアの学生としては必要な価値観だと思います。しかし、彼らの人生設計に関わっていく社会福祉士としては、彼らの社会復帰と現状との距離や、彼らの心境を本人から伝えたいと思えるようになるまで関係を構築することから始めることが大切なのだと感じました。残り二年、社会福祉士になるために当事者との関係構築のノウハウを当事者と関わることで学びたいと考えました。

【学】受刑者が二度と再犯しないような社会にするために、マザーハウスのような活動はなくてはならないものであるとすごく思いました。ご自身が元受刑者であるからこそ分かる受刑者の孤独さや苦しみがあって、それをなんとかしたいという気持ちがすごく伝わってきました。一人の人間として目の前の人を大切にする、犯罪者ではなく一人の人間として大切にすることが必要なのだと分かりました。

一兵さん「Kちゃん記念切手」

【学】五十嵐さんの人生歴を聞いたときはびっくりしました。二十年は長い生活だなと思います。刑期を終えた人の更生に尽力していると聞きましたが、そこで疑問に思ったのは、失礼かもしれませんが、刑期中に被害者に対しての反省は終わっているのではないかと思いました。確かに、人によってはその反省期間が遅い方もいらっしゃいます。あとは、「現在の刑務官が変わらないと…」の話についてですが、刑務官への精神的な負担が解消されないことが、問題解決に至っていないのではないかと思いました。

【五】刑務官が自由に話せる場所が必要であると思います。

【学】福祉の専門の方がケアをしてあげるべきなんだと思いました。刑務所は孤独の世界であり、自由は空気を吸うことくらいしかない、というのはびっくりしました。受刑者と向き合うべきだと感じます。目の前の人を加害者、受刑者として見るか、それとも一人の人間として見るか…今日の講演を聞いて受刑者の気持ちがよく分かりました。人は何で犯罪に手を染めてしまうのですか？

【五】その人の生育環境もあると思います。自分の欲望を優先するからではないでしょうか。

【学】法務教官の試験を受験しようと考えている身なので、非常に参考になりました。しかしながら、重大な犯罪をした人を前に向き合いきることができるかと問われると、そうも言いきれない自分がいます。まずはどのような心構えが必要でしょうか。

【五】相手を信じてやること、大切に思うことだと思います。

【学】この授業は更生保護がテーマで、第一回から今回にかけて様々な内容を学んできました。その中でも今回の講演は、刑務所に入って出所した後の受刑者の社会復帰や、マザーハウスがどういう活動をしているかについて、そして五十嵐さん自身の想いを語られる講演ということで、私自身すごく考えさせられる内容となりました。授業で先生が、こういう事があった、刑務所に入ったらこういう事をするんだと話しても、それは誰も体験してはいないですし、実際に見たわけでも聞いたわけでもありません。そういった意味では、今回の講演会で、罪を犯して実際に刑務所に入って出所して社会復帰を果たし、そこで思ったこと、感じたことを元に活動をして、出所者の社会復帰を支援している五十嵐さんの話を聞けたことはとても大きなことだったと思います。

日本の法律では、制度と制度の狭間にいて助けて欲しくても助けてもらえない人がたくさんいる、と社会福祉を学んでいく上で聞いたことがあります。それは出所者の方たちも例に漏れず、苦しんで助けて欲しいと思っている方たちはたくさんいるんだろうなと感じました。確かに罪を犯してしまえば否応なく犯罪者として扱われてしまいます。起こした事件の規模が大きければマスコミも実名、顔が分かるような形で報道し、ネット上でも、その加害者を非難する輩が残念ながら少なくはありません。しかし、どんな犯罪が起きるにしても、きっとそうなってしまった何かの理由があるのではないかとまで考える人は果たしてどれくらいいるのだろうかと思います。もし誰かが話を聞いてあげていたら、親族や友達や地域の人たちがもっとその人に関わってあげられていたら、この犯罪は起こらなかったのでは、と考える人はどれくらいいるのか。きっとここまで考える人って少ないんだろうなと思うと、何だか悲しいです。

もちろん、昼のワイドショーや深夜のニュース番組では、加害者の過去や裏では何があったのかという追求をする時もありますが、大体の報道の仕方というのは、こういう事件があった、犯人はこういう職業で何という名前か、調べによると容疑者は何々と述べ容疑を認めているか認めていないか、という情報だけで終わってしまいます。こんな報道の仕方では、加害者がどうしてそのような状況に陥ってしまったのか、事件を起こさない為に何かできたことはないのか、ということを国民に考えさせるというアクションを起こせません。加害者の気持ちを考えると、このままでいいはずがないと私は思います。

人間は誰しも失敗する生き物です。その失敗が大きかれ小さかれ、人間にはやり直すチャンスというものが必ずあると思います。加害者だって同じ人間であって、差別される対象では無いのです。社会復帰をして誰かの役に立ちたい、こういう仕事をしてみたいというのは、人に平等に与えられた権利であって、誰も侵害することはできません。加害者だから権利がない、なんてことは決して起きてはならないと思います。とは言え、加害者の社会復帰というのは簡単じゃないことも、五十嵐さんの話を聞いて分かりました。簡単ではないけれど、NPO団体の皆さんと力を合わせて日々頑張っていらっしゃるのだなと思いました。まだまだ日本には解決しなければならない事がたくさんあると思いますが、加害者そして加害者家族が明るい生活を送れるように少しずつ変えていけたらいいのではないかと思います。今後も活動頑張ってください！

【五】是非、マザーハウスを応援して頂ければ幸いです。そして周囲にマザーハウスの活動を伝えて頂ければ社会が変わってくると思います。宜しくお願い致します。

【学】五十嵐さん自らの経験を糧として、社会復帰を目指す方にとって必要なことや支援を熱心に考えられているのがお話からも伝わってきました。福祉に携わってきた身として凄く大切なお話だと感じましたし、勉強にもなって、とても有意義な時間を過ごすことができたと思っています。

【学】元受刑者の更生などは、社会から見て賛否両論のあることだと思います。その中で元受刑者も一人の人間として、自分と向き合うことができず自暴自棄になっていることから、社会と向き合うことにより更生に近づくというのは、私は賛成で、とても共感できる支援だと思いました。

【五】社会との繋がりが社会復帰には必要だと思います。

【学】自分で考えさせることに意味がありますよね。社会復帰には大人の力が必要になると思いますか？

【五】社会の人たちの力が必要であると思います。

Y刑　Tさん

【学】宗教で人生が変わることがあるのは分かっていたつもりでしたが、実際に話を聞いて、宗教の影響を受ける前と受けた後で行動がどのように変わったのかを聞けて、宗教はすごいなと思った。また、一度変わったとしても、それはきっかけに過ぎないので、その後も行動し続けているのは素晴らしいと思います。

【五】有難うございます。祈りは愛、愛は実践であると思います。

【学】マザーハウスを作った五十嵐さん自身が三回刑務所に入所したことがあり、その時から現在にかけて経験した「自分自身、さらに家族までもが誹謗中傷に遭う」等、辛い思いを沢山したことにより、マザーハウスを設立しようと考えて、行動へ移したことに驚愕しました。自らが経験したからこそ、その人の気持ちが分かるこそできるのではないかと思いました。五十嵐さんがおっしゃっていた、「犯罪者とか障がい者とかに関係なく、一人の人間として目の前の人と接するのが本当の社会福祉士である」「ゆるすのが愛」という言葉は社会福祉士に限らず、全ての人に共通することだと思います。この言葉を私は忘れないように生きていこうと思いました。

【五】障がい者は愛するのに値しない人ですか？牢にいる人は愛するのに値しない人ですか？を常に自分に問いかけて行動して頂ければ幸いです。

【学】教科書にない部分、現場でしか学べないことについて改めて考えさせられました。再犯を防止するためには、周りの人間の協力が大切で、だから刑務所は社会と繋がりを持つ場でなければならないのだと分かりました。人と見るか受刑者と見るか…技術や知識も大切ですが、やはり一番は気持ちの問題であると今回の講演会で思わされました。

【学】福祉のプロの方でも、本人や家族の声を聞きとらないということを聞き、悲しくなりました。関われば関わるほど、良い面も悪い面も見つけることができるのに、関わる前に決めつけてしまうのは本当に勿体ないことだと思います。現場に出かけて直接触れ合い、社会の繋がりを大切にしたいと思いました。

【学】受刑者にとって、社会の繋がりや居場所が必要であるという言葉が印象に残りました。受刑者が自分を理解し、さらに社会もその人を受け入れていくということが大切であり、その架け橋となるために福祉が重要であると分かりました。また座学だけでなく、現場に赴き当事者の声を聴くことで、より実践的な働きかけができるのだということが分かりました。

【学】もう少し受刑者が話しやすい刑務官を設置すべきだと感じました。そうしたら獄中の生活も少しは変わると思ったからです。

【五】刑務所の中に、受刑者と刑務官の語る場所があれば良いと思います。

【学】刑務官だって人間なのに、どうして作業中に水もダメなのでしょうか？

【五】刑務所は組織であり、上司が言うことは絶対、ということなのでしょう。

【学】関わりがあるということは、社会との繋がりがあるということなので、刑務所は孤独ですが、文通があれば乗り越えることができるのかなと思いました。また、刑務所での自由は「息を吸うこと」くらいである、ということに私は疑問を持ちました。確かに罰されるために刑務所にいるのだと思いますが、一人の人間として生きているわけで、罪を償うために入所しているから、そこまで追い込む必要はあるのかという疑問を持ちました。

【五】それだけ自由が制限され、管理されている場所であるということです。私は管理の中で本当の更生・回復は無理であると思います。

【学】「目の前にいる人を大切にする」「目の前にいる人の話を、一人の人間としてしっかり聴き、向き合うのが本当の社会福祉だと思う」と話していたことが印象に残りました。本当にその通りだと思いますが、実際の現場はどうなんだろう、時間がない等の理由で向き合えていない人が多いのかなと考えました。私は数ヶ月後に障がい者施設に実習に行きます。実習に限ったことではないけれど、単なる利用者として関わるのではなく、一人の人として向き合いながら関わりたいです。

刑務所に入ったことのある人って、正直どんな人だろう、怖い人なのかなと思っていましたが、お話を聞いて、ただのイメージでしかなく、今までずっとそう思ってしまっていた自分を恥ずかしく思いました。

【五】だからこそ、触れ合うことが大切であると思います。

【学】加害者家族の声を聴くことも大切なのだと思いました。

【五】是非、犯罪に巻き込まれた人たちの話を聴いて頂きたいです。

【学】五十嵐さんは「目の前の人を大切にする」ことを受刑中に学んだとありましたが、本日のお話を聞いて、この言葉がとても大切であることを学びました。福祉の資格を有していても、勉強だけで当事者との関わりが薄い人のエピソードや、福祉機関などが聞く耳を持ってくれてないエピソードを知り、何のための専門機関なのだろうと、衝撃でした。目の前の人を受刑者や出所者と見るのか、一人の人間として見るのか、という問いかけに、冒頭で話されていた、「目の前の人を大切にする」ということの重要性に気づかされました。頭では偏見を持たないと断言できたとし

ても、実際に目の前にしたら、一人の人間として見ることを果たして確実に行えるのか、正直、戸惑いを感じてしまいました。だからこそ口だけで終わらせたくないと思いました。これもまた話されていたように、知識を培うだけでは、本当の意味での対人関係の大切さに気付くことができないと感じました。また、「マザーハウス」という名前の由来として、お母さんの子宮、つまり、常に守ってくれる、大切にしてくれる優しい居場所、ということを聞き、私もそのような人間になりたいと思いました。

刑務所での生活について聞き、常に監視が入っている空間は、想像を絶する計り知れない状況だと思いました。また、うがいをしながら、水分を得ているという現実に驚きでした。熱中症で命を落とす人もいるのに、水分を自由に得られないのは、人の命を軽く見ているようで聞くに堪えないものでした。刑務所内で心のゆとりや安らぎを感じるというのは、厳しいものではないかと思います。だからこそ、社会復帰するために、社会の繋がりを絶たないためにも、文通があることを知り、素晴らしい試みだと感じました。誰かとやり取りを交わすことによって、自分の存在や想いを伝えられることは、その人にとって希望となるのではないかと感じました。今回のお話を聞いて、自分が福祉を学んでいる中で向き合うべきものや、考え方を見つめ直してみようと思いました。

【五】是非、当事者たちの声を聴いて頂ければ幸いです。

【学】教科書の知識は大切ですが、それだけが全てでなく、現場で実際に触れ合ってニーズを把握し、実施する必要があると改めて理解しました。また、例え罪を犯した受刑者だとしても一人の人間であり、差別されることは許されてはいけないことだと思います。社会性を本当の意味で学べる場所が必要なのだなと実感しました。現状、刑務所に自由はなく、水も自由に取れないということにすごく驚きました。また、自分で考えて行動する場面が提供されていないと以前講義で耳にしました。安心できる場所、コミュニケーションがとれる場所、人間らしい生活のできる場所、じっくり自己について考えられる場所が必要なのだと理解できました。

出所したばかりの人たちが再び行き場を失くしたり、孤独感を感じたりして再犯に繋がってしまうような社会ではいけないと感じました。それでは、出所したところで今までの生活が変わるわけはなく、その後、生活をどのようにしたら良いのか分からないと思います。なので、警察・刑務所は国にとっての利益や世間体を考えるのではなく、福祉・医療・就労施設ともっと連携することが必要だと分かりました。今回の講義で更生保護についての興味がとても湧きました。

【学】マザーハウスでは自由だから厳しい、と聞いて、刑務所で自由を奪われてしまうと、いざ社会に出て自由になったときにどう生活していいのか分からなくなってしまうのではないかと思いました。

【五】刑務所で、社会性や言葉や考える力を奪っているのだと思います。

O刑　Iさん

【学】今回のお話を聞いて、再犯を防止する機会が受刑者に対してどれだけ与えられるかが、回復の鍵になることが分かりました。話をされていたなかで、「一人の人間として目の前にいる人を知らんぷりするか、助けるか」という言葉に衝撃が走りました。困っている人を助けることは当たり前のこととして、誰もが持ち合わせている道徳的な心理であるにもかかわらず、犯罪者だから関わったら何されるか分からないと、中身を見ようとせずに外見だけにとらわれて助けられたはずのものを助けずにそのまま放っておく事態が起きている状況があることが、とても悲しいと思いました。

今までに過ごしてきた環境が人それぞれ違っていて、もし自分も同じ状況に置かれていたら犯罪をしていたかもしれないと思います。だから、暮らしてきた環境は異なるけれど、同じ人間なのだからお互いを助け合って生きていく、犯罪したことに関わらず一人の人間として接することに同感していました。将来ソーシャルワーカーを目指す者として、目の前にいる当事者の言葉に耳を傾けて受け入れる姿勢を大切にしていきたいと思いました。授業の知識だけでは得ることのできなかったことがあったので、より良い時間となりました。

【学】学校の授業や本に載っていることが全てではなく、受刑者一人ひとり性格が異なっているため、本人の声に耳を傾けることが大切だと感じました。罪を認める、償うために罰を与えることは続けていくべきだが、日本の今の刑務所内での生活は変えていくべきだと思いました。

【五】皆さんと共に日本の刑務所を変えていきたいです。

【学】改めて、犯罪をしてしまった人の社会復帰というのはかなり難しいものだと気づきました。一度犯してしまった罪に対してゆるしを得ることは難しく、ゆるしを得るためには考えられない程の努力が必要であると分かりました。また、多くの支援がある中でも、最終的には自らの意思が一番大切なのだということ、そして、人は必ず過ちを犯してしまうものですが、その先でどう生きていくか、それが大切なのだということが分かりました。

【五】他人を変えることは難しい。だからまず、自分自身を変えることが大切だと思います。

【学】人間の在り方について学びました。前科がある方、障がいを持っている方を特別な目で見るのではなく、一人の人間として話を聞いてほしいとおっしゃっていて、とても心を打たれました。ネットなどを見ていると、犯罪者や受刑者に対する意見や偏見がひどいです。罰を与えるよりも、その人の回復を考えることが大切なのだと学びました。

【五】是非、当事者の声を聴いて頂ければ幸いです。

【学】あまり公にされない刑務所の実態を経験者から聞くというのは、一つひとつの言葉に重みを感じましたし、現実を知ることでより司法福祉を勉強していく意欲に繋げることができました。

【五】知ることが愛の始まりだと思います。

【学】多くの受刑者が孤独であり、自分と向き合うことができず自暴自棄になっていること、そして、心に傷を持っており人の愛を知らない、という現状を知りました。犯罪をしてしまう人も同じ人間だということを改めて感じ、愛されている実感の重要さを知れて良かったです。

【学】犯罪をした人を社会から隔離するというのは、おかしいと感じます。本当に「福祉」が機能するのかというところに疑問を抱きますし、機能していないからこそ再犯に繋がってしまうとも考えられます。

そして、「自分を変えられるのは自分だけ」という言葉に共感します。私は、いじめを経験したことがあります。その際、周りの人にたくさんお世話になりましたが、最終的には「自分が変わろうとしない限りは何も始まらない」という結論に至りました。私を被害者としてではなく、「一人の人間」として扱っ

てくれる人に出会い、自分の足で一歩を踏み出せた時に人は変われる、ということを改めて実感することができました。

【学】統合失調症、認知症の方のお話を聞いて、本人の自己判断が鈍って犯罪を起こしてしまうなど、まだまだ知らない背景があるのではないかと思いました。

　また、どうすれば良いのか分からなかった人が、社会福祉士やその他の専門家の方たち、当事者の方たちの知識や経験によって回復したり、自分で考えて行動する力を養っていったり、多くの人がマザーハウスに訪れることによって居場所が新しくできたりする環境は大切だなと思いました。受刑者や元受刑者の人たちに対して人として扱ってこない刑務官がいることや、貧困や虐待などが起きている現状を知って、刑罰が目的となるのではなく、むしろ刑罰によって社会復帰しやすくなる取り組みがもっと必要なのかなと思いました。

【学】支援をしている立場から見て、例えば覚醒剤で捕まっている受刑者について、「もうやりません、と（自信満々に）答える人よりも、やってしまうか分からないと答える人の方が（「もしかしたら簡単にやってしまうかもしれない」という可能性を考え、自分を過信していないという意味で）立ち直りやすい」と話しておられました。支援をしている専門職として、他の一般の人とは違う視点を持っているからこその考えだと思い、勉強になりました。

【五】感じたことを多くの人々に是非、伝えてください。お願いします。そのことによって周囲が変わっていくと思います。

【学】五十嵐さんは社会との繋がりが大切だとおっしゃっていましたが、私も同じ考えを持っています。社会との繋がりを断ってしまえば、生きていくのが辛くなってしまうだろうし、私たちも目を背けてはいけない問題だと思います。「みんな同じ人間である」という言葉を忘れずに、言い方はおかしいかもしれませんが、平等に接していくべきだと強く思いました。

大阪のピーちゃんさん
「アナとエルサとオラフは、いつでも仲良し」

【学】五十嵐さんが、受刑中、刑務所の中にいる高齢者の介護や、文通での犯罪被害者の母親との出会いを通して、今、目の前にいる人たちを大切にするということや、被害者の声を聞くということが何より大切だと学んだ、とおっしゃっていたことが印象に残りました。マザーハウスでは、受刑者と社会の人たちが文通でやり取りをする活動を行なっていると知り、その文通が受刑者の心を支えていると学びました。それと同時に、受刑者や出所者の方たちが更生の道を歩むためには、周囲の人たちのサポートや社会との繋がりが何より大切であること、自分を気にかけてくれる人がいることが、当事者にとっては大きな支えとなることを学びました。

　私は、受刑者や出所者の方々に対して、怖い人という風なイメージを持っていましたが、今日のお話を聞いて、他人事と思わないでその方々を受け入れる心を広く持ち、少しでも力になりたいと思いました。

【五】一人ひとりの大きな愛が当事者を救うことになると思います。

【学】今まで、刑務所＝罪を償う場所、罪を償うのは苦しい思いをする、というイメージがありました。ですが、今日のお話を聞いて、刑務所は、自分を変えて社会に復帰できるようになる場所でもあるべきだと学びました。

―つづく―

ささきみつお コーナー

待て、しこうして希望せよ！

＊ブログ：http://ixsasaki.ti-da.net/

『巌窟王』（アンドレ・デュマ作）という、実に痛快なストーリーがある。

愛する恋人と晴れの結婚式の最中。突然、式場に警官隊が乗り込んできて、新郎を逮捕・連行した。彼は裁判にかけられ、無実なのに無期禁固刑を言い渡され、絶海の孤島の地下牢に閉じ込められてしまう。

「神はなぜこんな不条理を許すのか！」。納得できない極度の苦悩の中で、自分を陥れた連中に対する憎しみと復讐心に燃え、彼は何度も脱獄を試みるが、すべて失敗。その後、たまたま獄中で知り合った年老いた神父から個人指導を受け、高度の知識と上流社会の教養を身につけた。死ぬ直前に老神父は、自分がスペイン王家から譲り受けた、「モンテ・クリスト島」に隠されている「巨万の財宝」のありかを彼に教える。

遺体収容袋から老神父の遺体を取り出し、自分が代わりに入るという機転により、彼は袋ごと嵐の海に投げ捨てられた。死に物狂いで袋を破って海中に抜け出した彼は、実に投獄後十四年目にして奇跡的な脱獄を果たす。

この主人公、エドモン・ダンテスはモンテ・クリスト島に渡り巨万の財宝を手にする。以後「モンテ・クリスト伯爵」と名乗り、貧困にあえぐ人たちを助けながら、自分を犠牲にして、贅沢に暮らしている連中に対し次々と正義の復讐を果たしていく。

この小説が新聞に連載されるとパリ市民は熱狂した。一回でも連載を休むと、フランス中が大騒ぎになった。それは何故か？「なんとかして問題の獄舎から解放されて自由になりたい」「自分の願っていることを思う存分に成し遂げてみたい」。エドモン・ダンテス（後のモンテ・クリスト伯爵）が見事にそれをやってのけるストーリーに、閉塞感に悩んでいた当時のフランス国民が共感したのである。

これは現代の私たち日本人にも、そのまま当てはまると思う。何の見通しもないまま、どんな難問の監獄につながれていようとも、神の時が来れば、神の方法によって、必ずそこから脱出することができる。難問に苦しみもがいていく過程で、自分を頼みとする自我が砕かれ、全能の父なる神に信頼する強い人に成長していく。こうして、希望をかなえるための、将来の土台が築かれていく。

問題には大切な意味がある。自分の能力を超える全能者にすがっていく姿勢を身につけることができるからである。神はどんな問題もあなたのために有益になるように解決してくださる。あなたにとって無駄な問題は一つもない。

「待て！しこうして希望せよ！」。モンテ・クリスト伯爵の最後の言葉である。「神の時を待ち続けなさい！それは必ず来る」「神に希望を持ち続けなさい！それは必ず実現する」。これこそ、イエスがあなたに語っている言葉である。ちなみに、「モンテ・クリスト島」は地中海に実在する島である。「モンテ」は「山」を意味し、「クリスト」は「キリスト」を意味する。

――「キリストの山にはすべての備えあり」（創世記二十二章十四節）

五十嵐亜利沙（妻）による

ラブリーDAYS

当事者Sさんが、次女のRちゃんと自動販売機でジュースを買おうとしたとき、Rちゃんが「（おかね）あるのー？」と言ってきたそうです。Sさんは、「やばい、見透かされている！」と思ったそうです（笑）。

育児日記

五十嵐亜利沙（妻）による

最近、家の中で小学校の授業が始まります。長男のA君が先生となり、体育の授業では「いち、に、さん～」と、三人で腕立て伏せなどをしています。その後、ひらがなを書く練習をしています。三人とも、きょうだい愛が強く、A君がパパに叱られていると、妹二人がパパを妨害します。Rちゃんは「おまえのちぇいだー！」と言って、小さな足で蹴って攻撃していました。また、座椅子の下にA君の足が入ってしまったとき、Rちゃんが「Aくんにごめんねしてー！」と言ってきました。

先日、A君と病院に一緒に行った帰り道、夕飯用にインドカレーを持ち帰ったのですが、「ママはお腹に赤ちゃんがいるから持ってあげる！」と言って、重たい荷物を最後まで持ってくれたのが胸キュンしました！

塀の中のたより

受刑者からこんなお手紙が届いています

職員の言葉

T刑　Mさん

先日、様々な事情から同囚に顔面を十五発くらい、腹を五発くらい、一方的に殴られ、調査となりました。殴られたことは正直どうでもいいんです。少し痛いけど、運動時間に目一杯運動して腫れ・痣ができても、そのうち治ります。医務診察では、少し見て終わりでしたが、自分で「自然治療でいい」と思っているので、「有難うございました」と言って帰りました。不満はありません。

問題は殴られた際の連行時です。途中、ダメージで貧血のような感じになり、立ちくらみがしました。職員さんが大勢いる中で倒れそうになり、膝をついたのですが、その時、「立たせーや！」と一人の幹部の怒鳴り声がしました。起こしてもらい、支えられて歩きましたが、普通はまず「大丈夫か？」だと思います。また、その後、処遇調室に一人でいた時、調室の外から「殺されればいいのに。ムカつく」など、誰か分かりませんが、一人の職員の声がハッキリと聞こえました。調室で夕食を頂く前でした。

誉さんの問い
「反省・更生・贖罪」を考えて

裕鴨さん

たより五月号の塀の中のたより「皆さんはどう向き合っていますか」（誉さん）を読み、私が考える反省・更生・贖罪について書こうと思います。

まず、自分の犯した罪に対して真正面から見つめることから始まると思います。被害者に対して、また、その家族や周囲の人々への影響、自分の家族への影響を、その人たちの立場に立って想像する。リアルに細部まで想像する。苦しみ、悲しみ、痛み、恐怖、絶望、怒り、悔しさ、困惑、…様々な負の感情を与えたことを自覚し、そして、その人たちが涙した姿を考えることが第一段階だと思います。自分に都合良く考えるのではなく、あくまでも被害者の感情を想像しながら、自分の言動、行動を律していく。これが私の「反省」であります。

そして、自分の家族、知人に対して不安を感じさせない生活を送って、自立する。他人に迷惑をかけずに、法を犯すことなく社会の一員として生きていくことが「更生」だと思っています。

最後に、「贖罪」ですが、私の犯罪の性質上、被害者と直接関わりを持つことが難しいです。償うことができない、取り返しのつかない過ちを犯した私には、贖罪というものは一生できないものだと思います。でも、だからといって、何もしなくていいはずがありません。私の「贖罪」は、生き方について、自分の在り方について、使命について、「どう在りたいか」を考えることだと思います。被害者に自分は「何」をしてしまったのか、表面的にではなく深く深く考えて、自分に都合よく言い訳をしないで、想像を深める。自分の行動や言葉を律し、省みる生活を通して、罪人としてどう生きるべきかが見えてくるのではないでしょうか。私はそう思います。皆さんはどう思いますか。

祈ることが一番

K刑　Tさん

たより五月号の特別コーナー「奇跡的なゆるし方」の中で、罪悪感とエゴに関しての記述がありましたが、読んでいて、罪を犯していた当時のことを思い出しました。当時の自分に全て当てはまっており、驚きました。人を傷付けることで罪悪感に苦しみ、その行為を繰り返すことで、自分の首を自分で絞めていたことに気付きました。人にしたことは返ってくる、というのは、まさにこういうことなんだと実感することができました。

数年前から、私は毎日寝る前に、その日一日の自分の行動や考えなどで悪いところがなかったか、思い返す時間を作っています。特に、人に対する言動について思い返して、もっとこうすれば良かった、もう少し優しく言うことができた、などと反省し、神様に「私の悪い言動をおゆるしください」と祈っています。この習慣を続けていることで、怒りで爆発しそうになることが減り、また、怒りを感じることがあればすぐ祈るようになりました。それでも忙しい時などは、人に対してきつい言い方をすることもあります。そんなときも、すぐに「私の罪をおゆるしください」と祈ることで、冷静さを取り戻すことができます。どんなことでも、祈ることで気持ちが軽くなります。人それぞれ考え方も違いますし、できること、できないことがあります。ありのままを受け入れることが大切だと感じます。そして、どんなときも神様に祈ること、これが一番だと思いました。

課題を出し合い、祈り合う

F刑　Iさん

先月はバースデーカードも送って下さり、めちゃくちゃ嬉しかったです。毎年バースデーカードを頂くたびに、「よし、今年も頑張ろう!!」という気持ちになります。書いて下さった方に心から感謝しています。

皆様から頂いた大きな愛の心を、私も他の人に与えます。今置かれている場所で実践します。自分のことはあまり考えずに、今やるべきことは何かと考えたとき、とにかく祈ることが一番だと示されています。たよりの文章を通しても、祈ることの大切さを教えられ、勇気づけられました。祈りによって心に変化が生まれ、感謝できるようになった、という内容を読み、励まされました。私たちの回復に一番必要なことは、もっと課題を出し合い、祈り合うことではないでしょうか。私も自分のことだけでなく、様々な問題を抱え、受刑生活を送っている方々のために祈ります。「何も思い煩わないで、あらゆる場合に、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます」（ピリピ四章六～七節）。このみことばを胸に、今のこの時間、もっと祈りに励みます。祈らなければいけないことはいっぱいあります。

暗くなるニュースが多い毎日ですが、こんなときこそ日々の生活に感謝し、希望を持って悔い改めの道を歩みます。

看護師　中谷先生による

健康相談窓口

大動脈瘤

今年は梅雨明けが遅く、豪雨による被害も全国にあらわれています。おまけに、新型コロナウィルスの感染も拡大してきています。皆様、体調を崩されたりしていませんか？

Ｙ刑務所において、七月から四回にわたって実施した健康講座が無事に終了しました。今回は、男性八名、女性九名の合計十七名と少人数でしたが、質問が大変多く、参加者の疑問解消に貢献できたかなと思います。来年一月にも健康講座を予定しています。

今回は、前回に引き続き、生命の危機に直結する病気として、大動脈瘤（だいどうみゃくりゅう）についてご紹介します。

大動脈瘤とは、大動脈（酸素が豊富に含まれる血液：動脈血を心臓から受け取って全身に運ぶ、体の中で最も太い血管）の血管壁の一部が、正常より一・五～二倍以上に拡張し、コブ状に膨れ上がった状態のことを指します。発症部位により、胸部大動脈瘤と腹部大動脈瘤に分けられます。

治療せず放置すると、やがて破裂し、ほとんどは急速に死に至ります。なお、大動脈瘤が自然に小さくなることはありません。

大動脈瘤の主な原因は、動脈硬化です。動脈硬化とは、高血圧症や高脂血症（コレステロール値や中性脂肪値が高い状態）などにより動脈が固く、もろくなった状態です。高齢になると、血管ももろくなるので危険度が増します。

大動脈瘤のその他の原因としては、外傷、大動脈炎（大動脈が炎症を起こす疾患）、マルファン症候群などの先天的な遺伝性疾患、梅毒などの感染症が挙げられます。また、喫煙も重要な危険因子です。

大動脈瘤は何の症状もなく大きくなります。そのために、発症しても自覚症状がなく、検診などで偶然発見されることがよくあります。大動脈瘤が大きくなり、周囲の組織を圧迫するようになって初めて症状が現われます。症状は発症部位によって異なります。

気管支やその付近の気道、肺が圧迫されると、咳や喘鳴（ぜいめい）（異常な呼吸音）、呼吸困難、胸のつかえ、喀血（かっけつ）（気管支や肺などから出血した血液を口から吐くこと）、血痰などが見られます。食道が圧迫されると、嚥下（えんげ）障害（ものが飲み込みにくくなること）が起こります。咽頭（いんとう）（鼻腔、口腔から食道の上端まで）につながる神経（反回神経）が圧迫されると、声がしわがれます。

胸部大動脈瘤の検査には、胸部Ｘ線検査、心エコー（超音波）検査、造影ＣＴ検査、ＭＲＩ（磁気共鳴画像）検査を行います。これらの検査でコブの形態や大きさ、発症部位などを正確に調べます。大動脈瘤が小さい場合は手術の対象になりませんが、通常、直径が五センチ以上ある場合は、手術を考慮します。

治療方法として、二つ挙げられます。

一、ステントグラフト内挿術
…大動脈瘤の発症部位にステントグラフトという器具を入れて、コブへの直接的血流による圧力を避け、破裂を予防する治療。

二、人工血管置換術
…大動脈瘤を人工血管へ置き換える手術。胸部大動脈瘤の手術は最も危険な手術の一つで、緊急手術の場合の成功率は六十～八十％となっている。

高血圧や動脈硬化のある方は、何かおかしいと気がついたら、直ちに担当刑務官に報告してくださいね。生命の危機に直結します。

回復プログラム 入門

★このコーナーでは、自分の心を書き出す練習をします。マザーハウスの回復プログラム（冊子）に既に挑戦しておられる方も、ぜひ取り組んでみてください。

【コツ】綺麗に書こう、丁寧に書こうとせず、リラックスして、出てきた思いをそのまま乱雑に書き出す。後でやろうと思わず、数行書くだけでも、今やってみる。

【補足】よろしければ、皆さんとの分かち合いとして、書いた内容を編集局にお送りくだされば幸いです（基本的にはたより掲載の予定ですので、掲載を希望しない方は掲載不可と明記してください）。

★今月号のテーマ：**【ホッとする】**
（以前も同じテーマに取り組んだ記録がある方は、今回の記録と見比べてみましょう）

一、私が一番ホッとするのは、どんな時／何をしている時ですか。
二、反対に、ホッとできないのは、どんな時／何をしている時ですか。
三、二で答えた状況の時、私はどんな気持ちになりやすいですか。

プリズムアート倶楽部

専門インストラクター ニロ先生による

★このコーナーは、絵画の模写を体験するもので、絵画技法の習得を目指すものではありません。模写（アレンジOK）の投稿を募集中です。

★当技法についての詳細を知りたい方、また、作品発表等について考えている方は、規定が設けられているため必ずご相談ください。

【夏祭りの日】

【今月号のコツ】始めに、花火を中心より少し右寄りに描きます。花火の全体の大きさは、画面の三分の二ぐらいに入るイメージで描きます。団扇（うちわ）の朝顔の花は、丸を描いてから金平糖のような形を描くつもりで、中心に描き入れてください。花の茎の部分は、逆三角形で簡単に描いています。スイカも簡単に、半円に種のつぶつぶを描き、縞々模様の皮をつけました。夏祭りのイメージとして、浴衣の女の子や金魚、団扇、スイカなどを描きましたが、各自の夏祭りのイメージに合うモチーフを楽しんでくださいね。

形は、ハンドペイントの良さを生かして、不揃いでも、何でも構いません。見本の絵と全く同じではなく、アレンジして、楽しく描いてください。絵は、自分の中のイメージを表現する事が大切なので、自由に、楽しみながら、表現されてください。

【解説】ボタニカルファインアート技法とパステルアートのコラボレーションで描いていますが、ボールペンや鉛筆等、入手し易い文具で描いてくださって結構です。ボールペンは、PILOTの細いペン等が推奨されていますが、描きやすいと感じるもので良いと思います。鉛筆は、形が見やすいように、B以上のもので濃く描くと、質感も柔らかく、描きやすいです。HBやH等ですと、固い質感の為、描きにくいかと思います。

文通をされている方は、見本の絵を色々とアレンジして、便箋や封筒に描くと、楽しく可愛いアクセントになりますので、ぜひお試しくださいね。

行事予定

▼8／18　14：00～
真生会館にて、森一弘司教と面談

▼8／19
愛知県庁 再犯防止担当部にて、面談

▼8／27　18：30～
カトリック本所教会にて、ＡＰＳ研究会

※他、土曜朝のＴＢＳラジオ「蓮見孝之 まとめて！土曜日」の取材があり、８月２２日に放送予定です。

ご支援　本当にありがとうございます！

2020 年 6 月 17 日～ 2020 年 7 月 13 日の寄付金
（内訳不明分も寄付金として含んでおります）

合計：**６３７,７００** 円
（別途 愛のプリズム宣教基金：**2,000**円）

編集後記　by 編集局

今月号ではいつにも増して後半がぎゅうぎゅうですが、お読み下さり有難うございました！

お知らせ

【NEW】2021 年 1 月以降、フランシスコ事業部は、会費を全額納付された方のみのご利用となります。フランシスコ事業部を利用されない方は、引き続き会費の分納が可能です。なお、マザーハウスに送られた切手やお金は返還できませんので、あらかじめ資料をよく読み、計画的に送られるよう、お願い致します。

【重要】下記に当てはまる場合は、事務局までお知らせ頂きたく、宜しくお願い致します。
○突然たよりが送られなくなった。
○刑期（出所日）が変更された。
○切手やお金を送った後、２か月が経っても、受領書が届かない。
○入会申込書もしくは会費を送った後、２か月が経っても、マザーハウスから何も届かない。
○年金に関する手続きを希望する。
○聖書（寄贈された中古のものです）の送付を希望する（送料８００円分が必要です）。

【重要】会費やフランシスコの費用を切手で納める場合は、８２円以上の切手のみ受け付けております。なお、切手で納める場合は、現金交換手数料（５円）がかかるため、算入額は一枚につき５円ずつ引いた額となります。（例えば、１００円切手を５枚送った場合は、５００円－手数料５円×５枚分＝４７５円として受領）。

○フランシスコを利用される際は、対応まで最大４か月ほどかかる可能性があることをご了承ください。

○身元引受不許可に関するお問合せが多いですが、マザーハウスでも詳細が不明なため、観察所に直接お問合せ願います。
　また、有期刑の場合、マザーハウスでやり直したい！という方は満期出所後のサポートも可能です。出所日の朝に必ずお電話ください。ただし、あくまで当分の住居や仕事がほしいだけ、という方のご要望にはお応えできません。

○たよりのコンセプトは、刑務所と社会の双方に向けて、「こういう意見・思いが届いています」と発信して橋渡しをすることなので、こういう考え・感性の人が刑務所・社会にいて、マザーハウスを通して自分と繋がりを持っている、という感覚で読んで頂ければ幸いです。
　なお、投稿文以外の普段の（事務局などに宛てた）お手紙から抜粋して掲載することがあります（受刑者の皆さんは、入会申込書に同意欄があります）。ですので、「掲載してほしくない」というお手紙・絵画につきましては、都度「掲載不可」と明記して頂きたく、よろしくお願い致します。また、たよりはマザーハウスのホームページでも公開されます。

マリアコーヒー（ルワンダ・コーヒー）

＊製造から販売まで、元受刑者が携わっております。

ＦＡＸ：03-6659-5270

メール：maria_coffee@motherhouse-jp.org （QR →）

価格： 粉２００ｇ または 豆２００ｇ …… ９００円＋税

カフェドリップ１０ｇ（１回分）…… １００円＋税

☆継続して購入・販売してくださっている皆さま（順不同）☆

カトリック茅ヶ崎教会／カトリック北仙台教会／カトリック所沢教会／カトリック浜松教会／カトリック東山教会／カトリック布池教会／カトリック菊名教会／カトリック中和田教会／カトリック新子安教会／カトリック碑文谷教会／カトリック桃山教会（平和環境部）／カトリック東仙台教会／カトリック春日部教会／カトリック足利教会／カトリック神田教会／カトリック太田教会／カトリック大分教会／カトリック西千葉教会／カトリック下井草教会／カトリック新潟教会／カトリック多治見教会／カトリック芦屋教会／カトリック鷺ノ宮教会／カトリック松戸教会／ドン・ボスコ社／クリスト・ロア宣教修道女会／日本カトリック神学院／聖母訪問会

☆ルワンダの祈り☆

ルワンダでは、1994 年、フツ族によるツチ族の大虐殺がありました。史上稀に見る残虐な内戦によって、ルワンダの人々は心身ともに非常に深い傷を負います。

しかし内戦終了後、恨みや憎しみから、復讐が復讐を呼ぶ状況に陥りかねない中、ツチ族の人々は、復讐ではなく、和解と共生を選択しました。マリア・コーヒーは、この和解と共生の地から届けられた生豆を使用しております。

獄中 POST シリーズ

＊獄中ボランティアの方が描いた絵画や文字を、ポストカード・封筒・便箋に印刷する企画です。

ＦＡＸ： 03-6659-5270

メール： motherhouse.tayori@motherhouse-jp.org （QR ↑）

入手方法：講演会等での販売のほか、ご注文を受け付けております。

☆ポストカード／封筒は 1 枚 300 円、便箋は 10 枚 300 円

☆ホームページにカタログ（随時更新）がございます。

☆収益は全て、身寄りのない方の住宅支援に充てられます。

また、ご寄付・ご支援くださった方に、デザイン等ランダムでお贈りしております。

マザーハウスたより 20'8 月号

発行日：2020 年 8 月 15 日　発行責任者：五十嵐 弘志

〒 130-0024　東京都墨田区菊川 1-16-17-102　NPO 法人マザーハウス

↑理事長 Facebook　↑理事長奥さんブログ　↑ MLP問合せ

ラウレンシオ（便利屋業）

＊元受刑者の就労支援の一環として、不用品処理、遺品整理、掃除などをさせて頂きます。お見積もりは無料です。

ＴＥＬ：03-6659-5260

ＦＡＸ：03-6659-5270

メール：lawrence@motherhouse-jp.org （QR →）

古本募金（きしゃぽん）

＊書籍や DVD を下記送り先にご寄付頂くと、マザーハウスに還元されます。

送り先：〒 358-0053　埼玉県入間市仏子 916

マザーハウス　きしゃぽん係

（マザーハウス事務所に送らないようお気を付けください）

ＴＥＬ：0120-29-7000

カウンセリング

＊当事者やご家族の方を対象に、専門家がカウンセリングを行います。

※価格は別途かかります。

メール：counseling@motherhouse-jp.org （QR ↓）

お問合せ

いつも有難うございます。随時ボランティアの方を募集しております。

ＴＥＬ：03-6659-5260

メール：info@motherhouse-jp.org （QR →）

ホームページ：「NPO　マザーハウス」でご検索ください。（QR ↓）

ご支援

☆正会員（一口 5000 円／年）　☆賛助会員（一口 3000 円）

☆社会復帰支援（ご寄付） を随時募集しております。

→振込口座名：

特定非営利活動法人 マザーハウス 【トクヒ）マザーハウス】

郵便振替口座 … 00170-0-586722

みずほ銀行 … 新宿支店 普通口座 2376980

☆洋服等の物資の送付先：

〒 130-0024　東京都墨田区菊川 1-16-18-1F　マザーハウス

（ＴＥＬ：03-6659-2110）